

## 1、はじめに

「ポストモダン」という言葉は、1934年にスペインの作家フェデリコ・ド・オニスによって初めて用いられたという。そこでは「モダンに対するマイナーな反応」を指して使われた。それから約30年のときを経て、文学批評の分野で再び使われるようになり広く一般に浸透していくことになる。建築界では他の領域に比べていち早くその言葉への反応が示され、建築家であり、かつ批評家でもあるチャールズ・ジェンクスの著書『ポストモダンの建築言語』(1977)では、近代建築の「死」が衝撃的にレポートされた。今回私たちは、そのポストモダンという一つの概念、またはその時代精神とも呼ぶべきものを、モダニズムからポストモダニズムへの過渡期に重点を置きつつ、建築と現代美術の二つの側面から見つめなおしてみたいと思う。

革命は20年も前に終わっている。われわれの仕事が30年代の仕事をこえねばならぬのは当然のことだが、30年代の連中が、それ以前の仕事をこえたのとは異なった方法によらねばならないのは明らかだ。(クリストファー・アレグザンダー 1960年)

## 2、less is bore ～より少ないことはより退屈なことである～

### 【近代建築を代表する3人の建築家】

- ◆ル・コルビュジエ (1887～1965・スイス)
  - ・コンクリート打ちっばなし
  - ・「住宅は住むための機械である」
- ◆ミース・ファンデルローエ (1886～1969・ドイツ)
  - ・鉄骨、ガラス
- ◆フランク・ロイド・ライト (1867～1959・アメリカ)
  - ・有機体

### 【ポストモダニズムを象徴する建築キーワード】

- AT&Tビル (1983・)
  - ・伝統的な建築モチーフの復活
  - ・フィリップ・ジョンソン
- ラスヴェガス
  - ・「退屈で醜い」
- アーキグラム\*
  - ・誌上で展開される建築プロジェクト

### 3、モダニズムの行き詰まり

□国際様式  
国家間の壁の消滅→文化的・地域的な特質の消失

□抽象性  
「普遍言語」の崩壊

□技術  
目的から手段へ

【大きな物語の終焉】 ジャン＝フランソワ・リオタール 『ポスト・モダンの条件』 1979年

近代とは「理性」と「進歩」と「真理」とを信じていた時代  
人間も社会も進歩していけるはずだ、と皆が信じていた

- ・モダニズムを支えていた、進歩主義、機能主義、が崩壊
- ・近代という時代が抱えていた問題の露呈
- ・アフリカ諸国の独立、黒人問題、ベトナム戦争、学生運動、キューバ革命、冷戦

### 4、モダニズム後の美術

モダニズム時代において、美術とは視覚的な形態によって判断されていたが、60年代以降は哲学的な考察、人間の欲望や感情、社会批判などもからむようになっていった。

#### ■モダン～ポストモダン早わかり年表■

美術史	一般史
1917 デュシャン、ニューヨーク独立芸術協会に「泉」を拒否される	1917 第一次世界大戦
1919 グロピウス、ワイマールに「バウハウス」創設	1930 世界大恐慌始まる
1931 デ・ステイル解散	1936 ヒットラー政権誕生
1936 バウハウス閉鎖	スペイン市民戦争勃発
	1939 第二次世界大戦勃発

1937	ピカソ《ゲルニカ》制作、発表	テレビ放送開始
1951	「アメリカの抽象絵画・彫刻」展(MoMA)でハロルド・ローゼンバーグ命名の「アクション・ペインティング」の語が公認	1945 広島に原爆投下 第二次世界大戦終結
1956	初ポップアート作品、リチャード・ハミルトン「いったい何が今日の家庭をこれほどまでに変え、魅力的にしたのか」	国際連合発足
1959	F. ロイド・ライド設計のグーゲンハイム美術館完成	1947 東西冷戦の始まり
	カプロー《6つの部分から成る18のハプニング》	1950 朝鮮戦争勃発
1960	イギリスのポップアート表面化	1955 バスボイコット運動、 公民権運動高まる
1962	「フルクサス」グループ結成 ウォーホル《キャンベル・スープ缶》	1960 ヴェトナム戦争開始
1965	コンセプチュアルアート、ユース《一つの、そして三つの椅子》	1966 中国文化大革命 全米女性組織(NOW)結成
1969	ハラルド・ゼーマン、「態度が形になるとき：作品—概念—過程—状況—情報」展	1967 ヴェトナム戦争の拡大 激化
1970	ロバート・スミッソン「アースワーク」「ランドアート」	1968 パリ五月革命 ソ連、チェコに侵入
1971	「フェミニズム・アート・プログラム」	キング牧師暗殺
1976	パフォーマンスアート	

## 5. まとめと考察

いち早くポストモダンの建築と呼ばれたAT&Tビルを実現させた建築家フィリップ・ジョンソンが、かつてはモダニズム建築のキャッチフレーズともいえる「インターナショナルスタイル」の提唱者であったことが、なにか「ポストモダニズム」という概念の理解に私たちを一步近づけてくれはしないだろうか。つまりポストモダニズムをひとつにはスタイル（形式・表現）の問題として扱うことができるであろうということだ。

またポストモダニズムを扱ったD.ハーヴェイ著『ポストモダニティの条件』では社会経済用語でポストモダニズムを分析しようとしている。ここでは、ポストモダン市場が発展する際の分散し多様化する段階をさすために必要なものとされている。そのような意味では、ポストモダニズムは資本主義社会の一形態とも言えるであろう。これらのことからいえることは、ポストモダニズムという言葉にひとつの定義を与えることはできないということ、つまりそれが用いられる場合や状況によって変化するということである。

発表で述べた「大きな物語」は、60年代後半の社会運動で多様化した価値観が認められることで「小さな物語」へと移行していった。その要因としてリオタールは、現代の世界がグローバル化し、さまざまな種類の多量な情報がメディアを通じて入り乱れている時代であることにより、世界に対して統一的な像を持つことが不可能になっていると、1979年に指摘している。それから40年弱がたった今、さらにその状況は進んでいると言えるのではないだろうか。

## 用語解説

### 【インターナショナルスタイル（国際様式）】

1932年、ニューヨーク近代美術館で開催された「モダン・アーキテクチュア展」の成果をもとに雑誌を刊行したヘンリー＝ラッセル・ヒッチコックとフィリップ・ジョンソンによって命名、宣伝された、過去10年間の近代建築運動の主潮流、すなわち世界に広がりつつある新傾向に共通する造形的特徴を「面に包まれたヴォリューム」としての建築、「規則性」の希求、そして「装飾付加の忌避」、以上の三つを軸に定義づけられたものをいう。この概念の提示は、ヴァルター・グロピウスによりなされ、その著書で、世界の技術と交通の発展を根拠に、個人や民族という枠組みを超えた人類共通の客観的な世界の到来や、その統一的な世界像について語られ、国際的視野に立つ普遍的な性格を持った新建築像として「国際建築」に必要性が唱えられた。

### 【アーキグラム】

6人のイギリス人建築家からなるグループ。アーキグラムとは、「ARCHITECTURE（建築）」「TELEGURAM（電信）」の造語。これまでの建築にはない大胆でポップな表現方法、社会状況や技術の直接的な引用を試み、さらに次々に発表された、楽観的なテクノロジーのユートピア計画によって建築会の注目を集めた。代表的な作品は、「ウォーキングシティ」、「プラグインシティ」があげられる。

### 【構造主義】

1960年代にあいまいで多義的な空間の性格の回復をはかる作業が、さまざまな形で模索され始めたときにあらわれた文化人類学の成果を取り入れた考え方。従来の機能主義による空間構成の方法では、合理性という観点から、「全体から部分へ」という巨視的な視点が貫かれていたが、たとえば、オランダ構造主義では、個別な再生を実現することに焦点をあてていた。

## 参考文献

- 『デザインのモダニズム』 ポール・グリーンハルジュ
- 『ラスベガス』 ロバート・ヴェンチャーリ
- 『建築の解体』 磯崎新
- 『ポストモダニティの条件』 デヴィット・ハーヴェイ
- 『現代思想芸術事典』 青土社
- 『マトリクスで読む20世紀の空間デザイン』 矢代眞己・田所辰之助・濱崎良実